『法華玄義』における眷属の意味

福島光哉

一

『法華玄義』は、一貫して『法華経』所説の開権顕実の論理を克明に展開したものであり、ここに取りあげる「眷属妙」の一節においても、智顗は眷属のもつ意味の追求を通して、『法華経』の「妙」なる由縁が開権顕実にあることを強調している。ただこの場合、智顗が「眷属」という仏教の教理上比較的なじみにくい概念を用いて、あえて十妙の一つに数えて論述していることは、少し注意を要するところであろう。一般に眷属という場合、それは仏の親族や弟子達を指し、歴史上の釈迦仏と深い関わりをもった人々のことであるが、智顗が『法華経』の上で眷属を課題とするに至った動機として、つぎのようなことが考えられる。

『法華経』には、たとえば四大声聞が「（昔日）我等は真に是れ仏子なることを知らず。」（信解品）と云い、舎利弗は「今日乃ち知りぬ。真に是れ仏子なりと。」（譬喩品）と云って、昔日は真仏子と知らなかった声聞が今日それを知り得たということ、更に「未だかつて人に向かいて此の如き事を説かず。」（信解品）と云い、「今、汝等が為に最実の事を説かん。」（薬草喩品）と云って、今まで声聞弟子に教えなかった真実を、今『法華経』において始めて明らかにするという。これは確かに法華以前の方便教説に対して、いま法華会座に至って始めて真実を明かす、いわゆる開権顕実に相違はないが、注意すべきことはこれらの経文を通して単に権と実との論理的関係を明かすだけでなく、その関係の背景となる何ものかが暗示されていることである。

それは昔と今、過去世と現在世を積極的に関係づける何ものかであり、更には過去と現在を貫ぬく何ものかがなければ、上掲の経文の暗示するところが浮かび上って来ないと云えるだろう。その過去世と現在世の関係を『法華経』では因縁周、とくに化城喩品において次第に明らかにしてゆくことになる。したがって智顗が眷属妙を解明する中で、上掲の経文を引用し、「今の経に仏自ら近権を開いて遠実を顕わす」[1]と云って法華経を讃嘆するのは、これらの経文に接した時の驚きと疑問を常に胸に秘めていたからではないかと推測されるのである。

智顗は化城喩品の大通智勝仏の由来および十六王子による法華覆講に着眼し、この時の結縁を基点としていわゆる種・熟・脱の三益の原理を見出していった。即ち彼は三種教相のうち化道始終不始終相を明かす中に、

此の経は仏の教を設くる元始を明かし、巧みに衆生の為に頓漸不定秘密の種子を作し、中間に頓漸五味をもって調伏長養してこれを成熟し、又頓漸五味を以てこれを度脱す。[2]

と云っている。このように智顗は大通智勝仏の結縁以来、今日の法華会座に至るまで衆生が化導されてゆくプロセスを、種・熟・脱の三種益物の展開として示すところに、『法華経』の施化の意を明かすという特色に注目したのである。かくして彼は開権顕実の思想内容を、著しく豊富にし充実させることができたのである。

さて、このように法華会座に参集した声聞や菩薩の種々相を論理的に解明し、眷属のもつ普遍的な意味を追求しようとしたのが、『法華玄義』における「眷属妙」の一節である。

二

大乗諸経論に説かれる眷属の相貌は実に多様である。釈迦仏八十年の生涯の間には、親族や仏弟子、更に外道邪見の者達、或いは釈迦仏の怨敵となった者や魔波旬となって仏を脅やかす者もある。或いはジャータカに登場する諸眷属もあり、三世を貫く法身大菩薩が仏の眷属として説かれることもしばしば見られる。そしてこのような眷属の種々相について、『智度論』の中にこれらを分類し組織的に論述されているので、まずこれに依って眷属の種々相を整理してみよう。

『智度論』には、諸仏の眷属に関して、内眷属・大眷属・菩薩眷属などに分けて論述されている。これは大品般若経の「菩薩が諸仏の眷属たらんとするには、般若波羅蜜を学ぶべし。」という経文を解釈したものである。[3] それによ

ると、内眷属とは、第一には釈尊が出家する以前に関わった眷属達、たとえば車匿や優陀那、瞿毘耶、耶輸陀羅などであり、第二に出家後の眷属として苦行時に随侍した五比丘、釈尊得道時には弥喜羅陀、須那刹多羅、阿難、密跡力士などをいう。つぎに大眷属とは、舎利弗、目連、摩訶迦葉、須菩提、摩訶迦旃延などの諸大弟子、或いは弥勒、文殊、颰陀婆羅など一生補処の菩薩をいう。

ところで仏身には随世間身と法性生身があって、随世間身とは歴史上の釈尊の如く、世間の生身になって現われる仏であり、その眷属は直前に述べた通りである。それに対して法性生身の仏は無量の大菩薩達が待従して来る仏のことである。たとえば『華厳経』に、仏が兜率天より下生するとき、八万四千の菩薩達が釈迦菩薩を導いて雲の月を籠める如くであったと説かれているし、『法華経』には、娑婆世界の地下より涌出した無量千万億の菩薩があって、これらはすべて釈迦仏の弟子であるという。このような菩薩達は法性生身の仏についての内眷属であり大眷属であると説いている。

ところで、仏の二種身について『智度論』[4]にはつぎのようにも云っている。第一に法性身とは十方の虚空に充満していて、無量の優れた色像や相好あり、また無量の音声をもって説法し、聴法の衆生もまた虚空に充ちている。そしてこの聴法衆も法性身であって生死人ではないという。第二には父母所生の身であって、この生身は現世に生を受け、未来世の衆生の為に方便として諸罪報を受けることもある、というのである。したがって、ここに父母所生の身とは随世間身の仏に、法性身とは法性生身の仏に相当する。

また法身の菩薩について、つぎのようにも論じている。[5]菩薩は結使を断じた時どうして世間に受生できるのか、との問に対して、菩薩は無生法忍を得、法性生身を得て処処に変化して衆生を度し、世界を荘厳するのであると答えている。

以上のことから、『智度論』においては、まず随世間身としての仏の眷属と、法性生身の仏の眷属に分けられる。そしてその夫々の眷属に内眷属や大眷属として分類できるというのである。

さて『智度論』による眷属の分類を依り拠にして、智顗は『法華玄義』の中で眷属として今世に受生する因縁について、理性眷属、業生眷属、願生眷属、神通生眷属、応生眷属の五種類をあげている。

第一の理性眷属とは、仏と衆生は一如であって両者は区別せられるべきではない、という道理からすれば、本来的

にすべての衆生は仏子であるとの関係をもつ。したがってその場合、衆生が過去世以来、仏との結縁があったかどうかに関わりなく、いわば大乗仏教の原理に立ってこれを眷属というのである。智顗は『法華経』の「一切衆生、皆是れ吾子なり」（譬喩品）と説かれるのに基づき、

理性として相関われば、任運に是れ子なり。[6]

といって、理性眷属を表わすのである。このいわば理念的眷属の成立する原理は、後節に改めて関説する。そして現実に諸経典に説かれるような釈迦仏の眷属や仏所に参集する菩薩たちの種々相について、智顗は業生眷属以下の四種類に分類している。

第二の業生眷属とは、自らの業報によって今世に仏の眷属として生れた者のことである。したがって最も身近かに釈尊の眷属となった人達、たとえば浄飯、摩耶、羅睺羅、更に提婆や阿難などがそれに相当する。そしてこの業生として受生した人々について、先世からの諸仏の結縁により調熟されて来た意味をたずねるのが、ここの課題だと云える。『智度論』には既述のように、これらの人々を内眷属或いは大眷属と名づけたが、智顗はこれを更に厳密に検討して、この釈迦仏の眷属として生れて来たのは宿世以来の業縁の索くところであり、その業縁は諸仏の下にあって供養し、諸仏教化の結縁のあったことを示すものであると考える。しかし、釈迦仏の眷属として受生した者の中には、釈迦仏に帰依し仏弟子となって仏道修行に専念する者ばかりでなく、提婆のように釈迦仏に背き逆害を行ずる者もあり、或いは仏の化導に無関心な者もあり得る。このように今世における仏縁は多様であるが、智顗が関心を抱いたのは、一貫して仏道を受持する眷属に対してであり、しかもそういう眷属には権実さまざまの教理を受ける因縁もまた多様となる点においてである。理性眷属にいうように、すべての衆生は本来的に仏子であるけれども、現実に仏性を見失って苦悩する衆生に対して、仏が衆生の機根に応じた方便の教説を用いて調熟する方法も異なり、そこから蔵通別円という四教それぞれの結縁として受生する、というのである。

第三の願生眷属とは、自らの業力によらず、かつて仏の説法に値遇した者がいま仏所に生れたいという願力によって再び結縁受道する者のことである。『法華玄義』には願生眷属の具体例を示していないが、湛然は『太子須大拏経』所説の目連の故事を一例としてあげている。これによると、先世に阿州陀という道人があり、彼は「太子須大拏が無上正真道を得る時、我れ第一神足の弟子となるべし。」との誓

願を立てた。その時の太子須大拏とは今の釈迦仏であり、阿州陀とは今の目連であるという。[7] この目連が神通第一の弟子となった故事などに基づき、自らの強い意志力によって仏所に受生する場合を願生眷属であると規定したのである。

第四の神通生眷属とは、先世に仏の化導を受け聖位に進んだ者は神通力を有するが、自らの報身受生の世界に身をおきながら、神足通（身通）により、わが分身が今世に仏所に受生する眷属のことである。したがってこの場合も、自らの強い意志力による受生と考えてよかろう。

第五の応生眷属とは、無生法忍を得た法身の菩薩にして始めて可能となる応身受生のことであって、『智度論』に説く法性生身の菩薩に相当する。したがって未だ中道実相の理に達し得ない、二乗や鈍根菩薩にこの応生眷属は有り得ない。智顗はこの応生菩薩受生の因縁について、熟他と自熟と本縁の三種に分類するが、この分類は、ほぼ同時代の浄影寺慧遠にも類似の学説が見られることは注意されるべきであろう。[8]

第一の熟他とは、法身菩薩が未得道の衆生に対して、これを調熟する目的をもって応身受生することである。智顗はこの熟他としての応身菩薩について、非常に強い関心をもって研究しているが、それについては後述することにしたい。第二の自熟とは、自らの仏道を一層推進するために、生身仏や法身仏の説法を聴かんとして仏所に応生する菩薩のことである。たとえばかの涌出の菩薩は、釈迦生身の仏の下に来集し、「我等も亦た自ら是の真浄大法を得んと欲す。」（如来神力品）というように、自熟自成を目的とする応生眷属のことである。第三の本縁とは、たとえば涌出の菩薩はもと釈迦仏の下で発心し、同じ仏の下に不退地に住することを得た。この有縁の法身菩薩がいま又釈迦仏の説法会座に来集する、というような意味をもつ応生眷属のことである。

以上述べて来たように、智顗は眷属の種類を『智度論』所説の分類をもとに、一層綿密な分析を行なった。そしてこれにより、更に諸眷属を価値的に評価してゆくための基礎的な分類を与えたと言い得るのである。

三

智顗によれば、今世において仏に値う因縁を得た者は、宿世以来の諸仏の結縁が浅からざる者でなければならない。しかし宿世において諸仏の説法を聞き仏道を志願して来た衆生といっても、実はさまざまな結縁があって多種多様な調熟がなされて今日に至ったのである。そして智顗はこの

諸結縁を蔵通別円の四教による結縁として、それぞれの眷属の位置づけ及びその価値評価を行なっている。そこでつぎに四教に基づく眷属のあり方について考察を進めよう。

第一に三蔵教の結縁によって受生した衆生は、業生、願生、神通生の三種眷属があって応生眷属はない。昔三蔵教の結縁によりすでに得道した者は、灰身滅智するから再び受生することはなく、したがって眷属はあり得ない。三蔵教の教理には、分段生死を越えた界外生死の世界は説かれないからである。ただ未得道の者は再び三界内に受生して眷属となることがある。その場合、往昔の結縁において仏法への信順の度合いに応じて、今世には仏の親族となったり、疎遠であったり、あるいは怨家に生れることもあろう。いずれの場合であっても、今世の釈迦仏の下で得道し、分段生死を出て涅槃を証する者は内眷属と呼ばれ、かりに親族に生れても得道せざる者は外眷属と呼ばれる。そして外眷属は仏の利益に預かれないから、縁尽きれば後仏に伝付されるのみである。なぜなら三蔵仏の場合、その化縁は一期に限られているからである。この点について湛然は、『弥勒大成仏経』の所説[9]に拠り、このような衆生は多く弥勒仏の出現をまって、仏弟子となることを示している、と解釈している。以上のように三蔵教の結縁による業生眷属は、得道のいかんに拘らず現在仏の眷属としては最後であるところに特色がある。

つぎに願生眷属とは、通教の誓扶余習によって分段受生するという教説に依り、これを三蔵教に適用したものである。先世の結縁によるも未だ得道せず、したがって見思二惑を断尽していない衆生が、自らの誓願により受生し内眷属となる場合である。そして親族に生れたり怨家に生れたりし、更にこの結縁により得道する者、得道せざる者などについては、業生眷属と同じである。

神通生眷属とは、先世仏の下において真諦の智を発し見道に至るけれども、阿羅漢果の証りを得ないため再びこの世界に受生する場合、神通力をもって今生において仏の眷属となる者である。この衆生の今世における得道、不得道等については願生眷属と同じである。

要するに三蔵教の下で結縁を得、今世の受生においても三蔵教の教理に従う衆生は、原則的には三界内の受生にとどまるから、得道して涅槃入滅するか、未得道のまま此の生を終えて後仏にその結縁を付託することになる。ただ願生と神通生の場合に限り、大乗の意に準じて断惑の衆生は三界の生が尽きたとき、界外変易生死の世界に受生する、と見ることができることを智顗は指摘している。

第二に、宿世において通教の結縁があった衆生の場合、その教理にしたがえば、三蔵教と同じく分段生死を越える世界に受生することはない。しかし通教は三蔵教より巧度の教えであって、界内受生に誓扶潤生を認めるので、界内の惑を断じても尚余習の力をもって受生し得る。これが願生眷属のモデルであって、他方世界あるいは方便有余土より来生することがある、という。その他は三蔵教の場合と受生の形態は変らない。

つぎに別円二教の場合、業生、願生、神通生の眷属について、その受生のあり方は前二教と本質的に変りはないが、前二教にはなかった応生眷属に大きな特色がある。これは別円二教の結縁を得て以来調熟されて、別教の初地、円教の初住に至って無生法忍を得た法身の大菩薩の受生をいう。そして応身菩薩として主として衆生を調熟するのであるが、その種々相について智顗は格別の関心をもって解明しているので、項を改めて述べることにする。

四

すでに述べたように、『智度論』には随世間身の仏の眷属だけでなく、法性生身の仏の眷属について指摘している。智顗はこれを応生受生の眷属と呼び、別円二教の大菩薩達が、他方世界あるいは実報無障礙土などから、この世界に分段身として出現した釈迦仏の下に、応身受生する菩薩のことであるといって、彼が最も重視した眷属である。そこでつぎに、これら応身菩薩の種々相について考察しよう。

まず智顗は「熟他」のために応身受生する菩薩について次のように規定する。即ち業生眷属として受生する衆生は、善根微弱のために自身の力で発心証道することが不可能である。そこで諸大菩薩はすでに得道し法性身を得ているけれども、この衆生に対して慈悲力をもって応生受生し、三界に入って彼らの師となり、彼らを仏所に向かわしめるのであるという。

この応生菩薩として第一に、釈迦仏の親族となって受生した人びとがある。たとえば摩耶は過去世に鹿女夫人であったとき千葉の蓮華を生んだが、その中に千人の小児がいて彼等は賢劫に千仏となったという故事に基づき、[10] 智顗は摩耶は千仏の母であり、浄飯は千仏の父であるという。このことからすれば、摩耶や浄飯は今世において釈迦仏の父母としての業生眷属であるというよりも、法身菩薩が応身として釈迦仏の父母となるために受生したというべきである。また羅睺羅は授記される時「常に諸仏の為に而も長子と作ること猶し今の如くならん。」（学無学人記品）と説か

れるように、単に釈迦仏の長子というだけでなく、千仏の長子となるのだと智顗はいう。

この釈迦仏の父母妻子などに関して『入大乗論』につぎのような所説がある。[11] 八地の菩薩はすでに結使を断じ尽くしているのに、最後身菩薩である釈迦菩薩が羅睺羅を生むことについて、もし釈迦菩薩に実欲があって羅睺羅を生んだのであれば、釈迦菩薩は成道して仏になったとは云えないではないか、との疑問に対し、仏は衆生を憐愍して我れに父母妻子の眷属有りと世間に示現するのである、という。したがって「幻化」としての釈迦菩薩が羅睺羅有りと示現したということもできるし、又「実人」としての釈迦菩薩が羅睺羅を生んだとしても過りではない。更に菩薩は方便もって不思議解脱を得、大地に住して衆生を成就するから、互いに化生して父母妻子となるのである、と説いている。

このことからすれば、釈迦仏をとりまく諸眷属はすべて菩薩の方便示現として、智顗のいう応生眷属にほかならないことになる。彼はその点について、

諸親族等、皆是れ大権、法身上地なり。豈に凡夫ありて、能く那羅延菩薩を懐まんや。[12]

と云い、単なる業生受生の凡夫が遇たま仏陀の父母等の眷属になる筈はないと主張するのである。

また智顗は声聞弟子についてつぎのように云う。『法華経』によると、舎利弗には過去世において大乗法を聞く結縁があったこと（譬喩品）、富楼那など諸声聞は「内に菩薩行を秘して外に是れ声聞なりと現じ、」「衆に三毒有りと示し」て「実には自ら仏土を浄む。」（五百弟子受記品）というように、諸菩薩が声聞の姿を示現して無量の衆生を済度するというのであるから、声聞弟子たちも釈迦仏の父母妻子と同じく、応生の大菩薩であるという。

つぎに智顗は、以上のごとき仏法内眷属だけでなく、外道や怨敵に対しても皆法身菩薩の所為であるべきことを主張する。たとえば提婆達多について『入大乗論』はつぎのように説いている。[13] 提婆は五百身にわたって釈迦菩薩の大怨となった。けれども提婆は果して仏の怨敵であったと断定できるのかどうか、もし仏の怨敵であったとすれば、釈迦菩薩は善を修し、提婆はつねに悪逆を行じたのに、どうして世に釈迦菩薩と提婆は相会うのか。提婆が仏の大怨であるというなら、如来世尊に大過があることになる。何故なら如来は一切智あり神通力ありと云われるのに、提婆の怨敵を滅尽することができないことになるからである。しかし仏に実の怨敵が存在する筈はない。転輪聖王のごとき福報の少ないものでさえ、この世に怨害無しという。況ん

や仏の大威神力に対して、かくの如き怨敵が存在することは有り得ないのである。

提婆が怨となり逆害を行じたのは、実は菩薩の方便として衆生に示現したのである。即ち提婆は破僧害仏の二逆罪を行じ、地獄に堕して苦しむ相を敢えて示現したのであり、その目的は衆生に対して、逆罪を行じた業報は破壊すべからざること、したがって衆生にこのような逆罪を犯すことを厳しく誡しめんがためである。提婆の本身は賓伽羅菩薩である、と。

智顗は以上の如き『入大乗論』の提婆達多論に多く啓発され、『法華経』の「提婆達多は善知識なり」（提婆達多品）と説かれることと符合する点に注目して、

調達は賓伽羅菩薩にして先世の大善知識なり。[14]

と讃嘆するのである。

智顗は阿闍世に関しても、弥勒仏のとき不動菩薩になるという経説[15]に依り彼を讃嘆しており、さらに外道の薩遮尼乾子もその故事に依り大方便菩薩であるという。[16]

又『維摩経』には、魔王となって諸衆生に難事を示すのも、方便を行じて衆生に堅固ならしめんとする菩薩の所行である、と説かれているように、[17]智顗はいかなる魔波旬といえどもこれは応身菩薩の熟他の行であるという。

以上のように、これらの諸眷属は仏と親怨いずれの関係をもち、また好悪逆順のいずれであっても悉く皆法身であって、先には法内眷属であった者が今は応生の眷属となるというのである。このことから釈迦仏周辺の諸眷属について、これを単なる業生眷属と見る限り、その善悪逆順の多様なあり方にのみ着眼することになって、その本質を見失なう危険性がある。智顗はその点を『法華経』の因縁周の説法に依って深く掘り下げ、先世の結縁以来の種・熟・脱の原則に立ちかえって、これを見直そうとした。そして今世の怨親逆順さまざまな関係や、本生・本事の逸話や伝説に見られるもろもろの関係が、いかにして成立するのかという原理を探究していったのである。そして彼はその原理を、往昔の大通智勝仏以来の不思議な結縁、及びそれに基づく法身諸菩薩の方便示現という『法華経』の教理に見出し、それによって「眷属」の意味するところを浮き彫りにしていったと云えるのではないか。

五

すでに述べたように、『智度論』においては法性生身の仏の下に法性生身の菩薩が眷属となる例として、『華厳経』の雲集せる菩薩や、『法華経』の涌出菩薩をあげており、そ

れに依って智顗は応生菩薩の理論を展開した。けれども智顗の場合、これら本縁あるいは自熟と考えられる菩薩眷属よりも、熟他の菩薩、中でも現世に釈迦仏と怨親さまざまな関わりをもって受生した人達に、一層強く惹かれたように思われる。それもとりわけ提婆のように、釈尊と怨敵の関係にあった者に、より強い関心を抱いていたのである。智顗は法華円教の究極を明示するときに、しばしば最も反仏道的なものとの不思議な調和、矛盾せる敵対者を自己の中に包含するような性格として表現する。たとえば『維摩経』の「非道を行じて仏道に通達する。[18]」とか『法華経』の「世間相は常住なり。」（方便品）などはその代表的な経文であるが、眷属の「妙」なる所以を明かすにあたっても、これらの経文と同じ方向性を示していると云えよう。彼は眷属の諸相を述べ終えてから麁妙を判別しているが、その中で彼は断善根の一闡提も心を断じない限り、なお反転回復して如来の結縁を得て作仏すること、或いは二乗のごとき色心ともに灰尽せる者さえ、世世に調熟せられて普く作仏することは、円教において始めて明かし得るのである、という。これを智顗は、

最上の医王は毒を変じて薬と為し、能く敗種を治して無心も成仏せしむ。[19]

という逆説的な論理をもって顕わしているのである。

さて法華円教において、仏の化道に対して謗法・逆罪など最も強く敵対する衆生を敢えて菩薩眷属なりと見なす根拠を、智顗はどこに見出していったのであろうか。『入大乗論』においては、それを如来の智慧力、神通力が無上最大であり、この仏を拒絶する衆生の存在は認められない点に求めようとした。けれども智顗はむしろ、衆生自身に本来的に内具せられている仏性に注目しているのである。彼は理性眷属を明かして、仏と衆生は本来一如であり、一切衆生は仏子であると述べたが、その理性の原理は一切衆生悉有仏性にあり、それは『法華経』に説き明かすところであるという。たとえば長者と窮子はもとより父子であり「窮子は客作に非ず」（信解品）と説かれることは、衆生の正因仏性に基づくのであり「もし如来の滅後において法華経の乃至一句一偈を聞く者あれば、阿耨多羅三藐三菩提の記を授く。」（法師品）と説かれているのは了因仏性、「低頭挙手せる者皆仏道を成じき。」（方便品）というのは縁因仏性である。そしてこの三因仏性がすべての衆生において不滅である、との根本原理の下に眷属の妙なる意味も明らかになるのである。そしてこの眷属妙の論理は、そのまま法華円教の論理の展開であり、いわゆる十界互具という実相

論から必然的に導き出されて来ると云える。

かくして智顗は、過去世以来、仏の化導を受けて調熟され、今世において仏所の下に受道する諸眷属の原理を、天台の開権顕実の論理の一環として、体系的に論じたものと云うことができるのである。

註

① 法華玄義巻六下、大正33―756c
② 法華玄義巻一上、大正33―684a
③ 智度論巻三十三、大正25―303a以下
④ 智度論巻九、大正25―121c
⑤ 智度論巻三十三、大正25―303c
⑥ 法華玄義巻六下、大正33―755c
⑦ 太子須大拏経、大正3―421a以下
⑧ 十地論義記巻一本、続蔵1―71―2―142左
慧遠によれば、華厳経・十地品の冒頭に大菩薩の来集について説かれていることについて、諸菩薩が仏の会座に来集する目的を㈠自為㈡為他㈢為欲讃揚三宝の三種に分けている。このうち自為というのは智顗のいう自熟に相当し、為他というのは熟他にあたると考えてほぼ間違いはない。ただ智顗には為欲讃揚三宝の菩薩をあげていないし、彼の本縁については、慧遠は自為や為他の菩薩が同時に本縁の菩薩であることを示しているなど、相違点があることも見逃せない。
⑨ 弥勒大成仏経、大正14―431c以下
⑩ 雑宝蔵経巻一、大正4―452c以下、鹿女夫人縁
⑪ 入大乗論巻下、大正32―44a以下
⑫ 法華玄義巻六下、大正33―756b
⑬ 入大乗論巻下、大正32―45c以下
⑭ 法華玄義巻六下、大正33―756b
⑮ 文殊支利普超三昧経巻下、大正15―425c
⑯ 大薩遮尼乾子所説経巻十、大正9―362b
⑰ 維摩詰所説経不思議品、大正14―547a
⑱ 維摩詰所説経仏道品、大正14―549a
⑲ 法華玄義巻六下、大正33―757a